

【豊かな心を】

取り戻そう！

現代社会に生きる我々の中には物質的に恵まれていても、なぜか心満たされない人が多い。仕事に追われ自分を見失っている人もいる。政治・経済・教育・高齢化社会と、私たちの抱える課題は多いが、外面ばかりにとらわれ、その根本にある大切な何かを見過ごしてはいないだろうか？そこで今月は人間の根幹にある「心」を、1つの実話を紹介しながらピックアップしてみたいと思います。

時は53年前、昭和24年の事です。長崎県の時津町に、打坂という急勾配の坂があります。そのバス停のそばに建てられている記念碑とお地蔵さんの前では、毎年慰霊の行事が執り行われています。

当時、地元長崎自動車のバスが乗客を乗せて、この坂を登っていました。坂の半ばに差し掛かった時、突然エンジンが故障し、バスは止まってしまいました。運転手はすぐにブレーキを踏んでエンジンを掛け直そうとしましたが、ブレーキが利かな

い。補助ブレーキも前進ギアも入りません。3重のトラブルが重なって、バスはズルズルと後退し始めたのです。そのバスには鬼塚道男さんという、21歳の若い車掌が乗っていました。

運転手は彼に大声で「鬼塚、すぐ飛び降りろ。棒でも石でも何でもいい、車止めに放り込んでくれ！」と指示しました。鬼塚さんはすぐに外へ飛び出し、目につく物を車輪に向かって片っ端から投げ込みました。しかしバスは止まりません。乗客のほとんどは原爆症の治療に通うお年寄りと子供達で、脱出はとても不可能です。その間にもバスのスピードはみるみる上がっていきま

んが「ハッ」と我に返ると、鬼塚さんがいないことに気が付きます。まだ車止めになるものを探しているのかと思い、「鬼塚！どこにおっとかあ

」乗客と一緒に探し始めます。すると「アアアアア」という叫び声とも、何とも言えない声が聞こえた乗客の指さす先は、バスの後部。運転手さんが、恐る恐るバスの後ろの方を見てみると、思わず息をのみました。そこには何と「後車輪に身を投げ、自ら車止めになっている鬼塚さんの無惨な姿があつたのです。鬼塚さんは、内臓破裂で即死。すでに息を引き取っていました。乗客は鬼塚さんを戸板で運びながら「この方は菩薩さんか仏さんの生まれ変わりだ」と口々に言い、涙に暮れました。その後、長崎自動車の社長さんはじめ、役員の皆さんで話し合った結果、会社で打坂のそばに記念碑とお地蔵さんを建てて供養することを決めました。鬼塚さんの供養祭は今でも続いています。自己を犠牲にして乗客を救った鬼塚さんの行為に、私は心から敬意を表します。そしてその事を知ってすぐに慰霊の行事を始めた長崎自動車の社長も、

実にすばらしい方だと私は思います。さあ皆さん、これがもし自分だったらどうでしょう？なかなか自分を犠牲にしてまでって訳にはいかないのではないでしようか・・・？

以前のハンド仏句で紹介しましたが、人は2度死を迎えるんです。1度目は自分の寿命が尽きた後の死。2度目があるんですよ。それは「自分という思い出を持った人が亡くなった（死んだ）時」なのです。

我々人間が死んだ後に本当に残る物は、財産でも肩書きでもありません。では何でしょう・・・？

それは温かい思いやりや、励まし、笑顔など、他人に与えたものこそが、感謝の心と共に、相手の心にいつまでも残ります。

たとえ自分が死んでも、自分という思い出を持った人が生きている限り、ずっと行き続けられるのです。

マザー・テレサは言いました。「天然痘も、ガンも、脳卒中も決して怖い病気ではありません。本当に怖い病気とは、あなたなんかこの世にいないでもいいのですよと言われた時の孤独です」と。老人の寂しさは、存在価値の希薄さからくると私は思います。誰からも必要とされず、い

つ死のうが全くなまわらない。死んでも誰も悲しまず、人の記憶にほとんど、とどまる事のない生き方は、ある意味では死よりも怖い病気と言えるかもしれません。

私達は今一度、心の原点回帰をしなければいけないようですね？

どうせ生きるのなら、人の心に温かい思い出を残すような生き方を心がけ、そして実際に行動したいものです。

合掌 副住職 谷川 寛敬